資料１

外国人児童生徒等による学習者用デジタル教科書の利用事例について（視察報告）

場所：横浜市立並木第一小学校
日時：12 月 18 日（水）２時限（9:30～10:15）
対象クラス・児童：
・国際教室における取り出し授業（３年生３名、外国につながる児童）
・会話は問題なくできるが、学習の中で文章を読んだり、書いたり、発表したりする場面で支援を必要としている児童（ＪＳＬ評価参照枠ステージ３・４の児童）
・今回の授業までに学習者用デジタル教科書を 10 日程度使用
内容：・国語の教科指導（一般の教室との並行学習）　単元：「言葉を分類する」
・学習者用デジタル教科書を使用
・ＪＳＬカリキュラムを踏まえた指導
ＩＣＴ環境と授業での学習者用デジタル教科書等の使用法：
（ＩＣＴ環境）
・児童１人につき１台の iPad を使用
・iPad と大型提示装置１台をそれぞれ接続して投影
・教室に無線ＬＡＮ、プリンターを設置
（使用法）
・教科書本文のポイントとなる点についてマーカーを引く
・付属教材のワークを使用し単語をその特徴毎に分類、考え方を端末上に記入
・大型提示装置に投影された各自のワーク画面を見ながら、教員の進行の下、クラスで意見交換
・最後に、ワークで作業した内容をプリンターで印刷
教員・教育委員会へのヒアリング結果：
（機能について）
・国際教室では、ルビ付きの紙の教科書等を準備しており、特に来日直後の児童等は、学習者用デジタル教科書の総ルビ機能が有効。
・マーカー機能について、外国人児童生徒等は、口頭の説明だけでは作業箇所を把握しにくい場合があるため、視覚的に確認できるよう、指導者用デジタル教科書や大型提示装置と組み合わせて使用できるとよい。
・読み上げ・朗読機能については、特に少人数の取り出し授業においては、他の児童の指導をしている際に活用できる。例えば、文節の切れ目がわからない児童の練習に活用できる。ただ、来日直後で日本語が殆ど定着していない児童の場合、読み上げ機能だけでは効果が低く、個別指導が必要。また、ＩＣＴ機器の持ち帰りができれば、一層効果的に活用できる。
・児童の状況により母語を使用した指導が有効な場合には、翻訳機能を活用できるとよいか。

（指導への活用について）

・それぞれの機能は便利だが、常に機能を使用するのが良いとは限らない。機能を使うことありきではなく、その良い部分を生かすという意識が必要であり、児童生徒の実力や指導環境によって、機能を使用せずに力を伸ばすということも考えられる（例：漢字を習得させる段階では総ルビ機能は使わない等）。

・外国人児童生徒等への指導については、「読む」ことも「書く」ことも必要であるため、まとめは紙のノートに書かせる等、指導の目的ごとに適切な指導方法を選択する必要がある。

・特に国語は外国人児童生徒等が一番苦手な教科だが、学習者用デジタル教科書を使うことでより意欲的に授業に取り組めている様子。

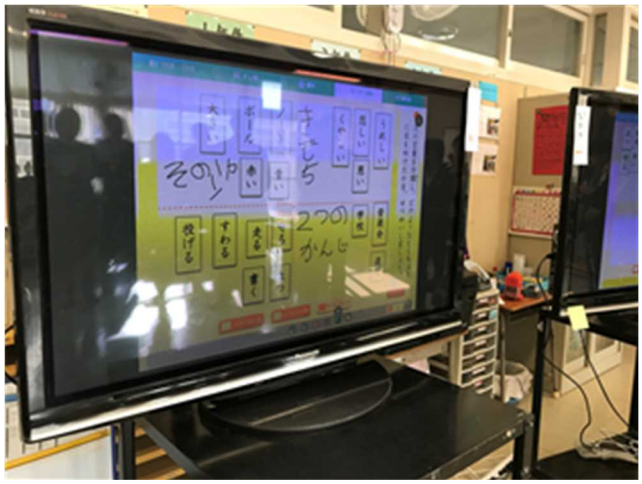
・少人数で個に応じた授業をする際と通常学級で一斉に授業する際で効果的な使用方法は異なり留意が必要。

・ただツールを使うだけではなく、それを授業の目当てに明確につなげる授業の構成力の向上等、教員の授業力の向上と合わせて進める必要がある。一方で、普及のためには、授業をより効率的に行えることを、教員に周知する必要がある。

（参考：授業の様子）

授業の目当てについて黒板を使用して共有

教科書の重要な部分にマーカー



言葉を分類し、特徴について記入

大型提示装置３台を使用してクラスに共有

学校教育におけるJSLカリキュラム

日本語を母語としない子どものための学習支援
（小学校編）

Japanese as a second language　（第2言語としての日本語）

概　要

ねらい

日常的な会話はある程度できるが、学習活動への参加が難しい子どもたちに対し、学習活動に日本語で参加するための力（＝「学ぶ力」）の育成を目指す。

特　色

- □日本語指導と教科指導とを統合。
- □学習項目を固定した順序で配置するのではなく、生活背景、学習歴、日本語の力、発達段階などの多様な子どもたちの実態に応じて、教師自身が柔軟にカリキュラムを組み立てることを支援。
- □子どもたちの理解を促すよう、直接体験等に基づいた学習を重視。
- □子どもたちが理解しやすい日本語を使い、表現を工夫。

方　法

- □直接体験などの活動への参加を通して、日本語による「学ぶ力」を育成。
- □子どもたちの「学ぶ力」に応じて参加可能な学習活動を設定し、活動に応じた様々な日本語表現のバリエーションを用意し、理解可能な日本語表現を工夫することにより、子どもたちの学習活動への参加とその理解を促進。
- □実践事例や教材、ワークシートなどに関する情報を共有するサポートシステムを構想し、授業に役立つ様々な工夫を支援。

外国人児童生徒の総合的な学習支援のために
～外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント

参考資料2

Dialogic Language Assessment For Japanese as a Second Language

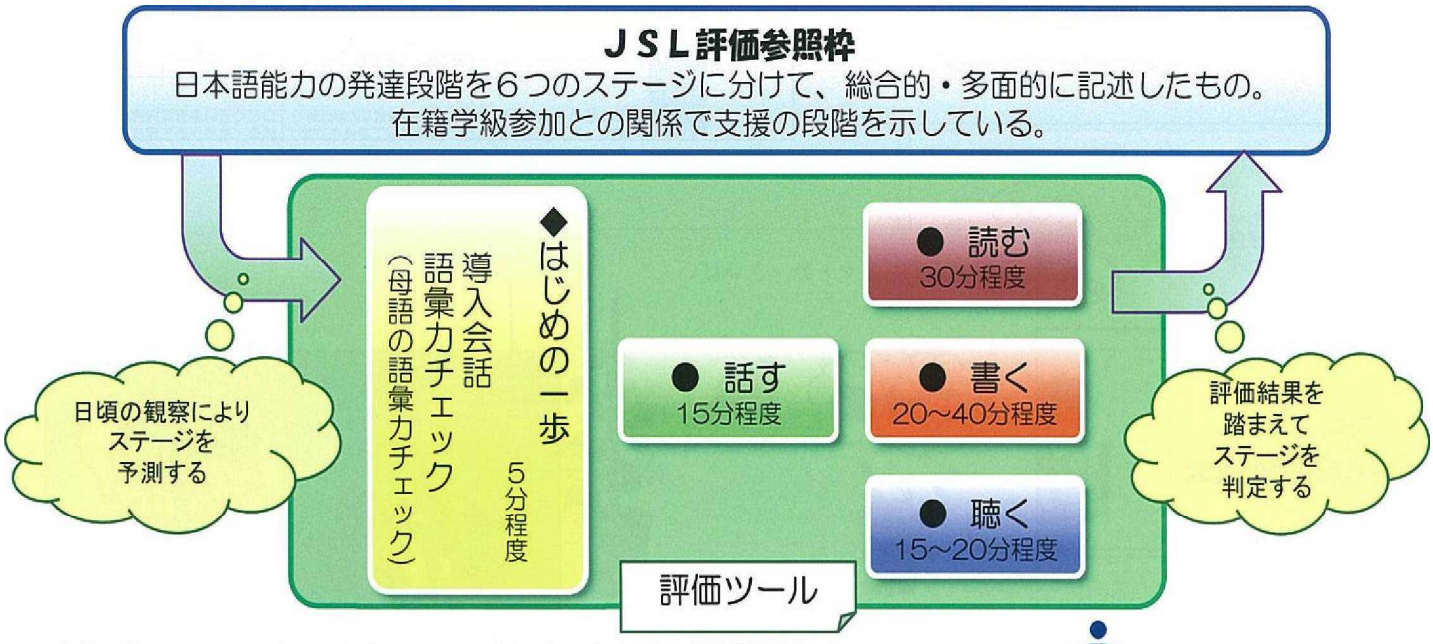
DLAのねらい

主に、日本語による日常会話はできるが、教科学習に困難を感じている児童生徒を対象としています。

子どもたちの言語能力を把握し、どのような学習支援が必要であるかを検討する際の参考となる情報を得ます。

DLAの特徴

一番早く伸びる会話力を用いて、一対一の対話で教科学習に必要な言語能力を「話す」「読む」「書く」「聴く」の4つの面から把握します。



http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003.htm

DLA　検索

文部科学省

参考資料３

「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」
（平成26年1月 文部科学省）から抜粋

◇「JSL 評価参照枠＜全体＞」

・**「DLA」**では、各技能別のテストの開発と共に、日本語の力の段階を 6 段階の「ステージ」に分け、総合的かつ多面的に記述した「JSL 評価参照枠」を作成しました。
・「JSL 評価参照枠＜全体＞」では、「在籍学級参加との関係」と「支援の段階」を 6 ステージで示しています。
・ステージ 1～2 は、日本語による意思の疎通がむずかしく、サバイバル日本語の段階です。在籍学級での学習はほぼ不可能で、手厚い指導が必要です。
・ステージ 3 は、単文の理解がむずかしく、発話にも誤用が多く見られるレベルです。
・ステージ 4 は、日常生活に必要な基本的な日本語がわかり、自らも発話ができる段階です。話し言葉を通したクラス活動にはある程度参加できるレベルです。しかし、授業を理解して学習するには読み書きにおいて困難が見られ、個別的な指導が必要です。
・ステージ 5～6 は、教科内容に関連した内容が理解できるようになり、授業にも興味をもって参加しようとするレベルです。読み書きにも抵抗感が少なく、自律的に学習しようとする態度が見られます。必要に応じて支援をする必要があります。

JSL評価参照枠＜全体＞

ステージ	学齢期の子どもの在籍学級参加との関係	支援の段階
6	教科内容と関連したトピックについて理解し、積極的に授業に参加できる	支援付き自律学習段階
5	教科内容と関連したトピックについて理解し、授業にある程度の支援を得て参加できる	
4	日常的なトピックについて理解し、学級活動にある程度参加できる	個別学習支援段階
3	支援を得て、日常的なトピックについて理解し、学級活動にも部分的にある程度参加できる	
2	支援を得て、学校生活に必要な日本語の習得が進む	初期支援段階
1	学校生活に必要な日本語の習得がはじまる	